

## 第26回 教育WG 議事録

1. 日時：平成17年9月16日（金）10：00～11：30
2. 場所：永田町合同庁舎1階共用第1会議室
3. 議題：『教員の理想像と不適格教員の実態等に関する保護者からのヒアリング』  
（“こんな先生に応援歌！こんな先生にレッド・カード！”）
4. 出席： 規制改革・民間開放推進会議  
草刈主査、白石委員、安念専門委員、福井専門委員  
保護者  
M氏、K氏、O氏、C氏、Y氏 5名
5. 議事概要

白石副主査

ただいまから第26回「教育WG」を開催させていただきたいと思います。本日の司会を務めさせていただきます、東洋大学の白石でございます。どうぞよろしく願いいたします。

本日は「『教員の理想像と不適格教員の実態等に関する保護者からのヒアリング』（“こんな先生に応援歌！こんな先生にレッド・カード！”）」と題しまして、実際に御自身のお子様の御体験、御経験などを通じて、問題がある先生というのはこういう先生なのだとかそういうことをお話しさせていただきたいと思います。

私どもは、今年度の最重要テーマとして教員の質の向上を掲げておりますけれども、これまで約三十回近くにわたっている様々な有識者の方からお話を伺ってまいりました。本日、改めてこの場で保護者の皆様方の生の声に耳を傾けることが重要であると認識しておりまして、お忙しい中、貴重な時間を頂戴しましてヒアリングに応じてくださいました皆様方に心からお礼を申し上げたいと思います。

私ども「規制改革・民間開放推進会議」側の出席者を簡単に紹介させていただきたいと思います。

まず、この教育ワーキングの主査を務めております草刈から一言ごあいさつを差し上げたいと思います。

草刈主査 さっきお話ししましたが、草刈と申します。普段は企業の経営者の端くれで、若い人の教育とかそういうことにも関わっていますが、一番大事なのは学校の教育で、特に義務教育の段階というのは非常に大事だと思っておりますので、そういう意味で皆さんから貴重な意見を伺うというのが今日の趣旨で、余り議論するのは趣旨ではございませんので、変な形で利用されたりということにはさせませんので、是非、御自由に、あるいは忌憚ないことをお話しいただければと思います。よろしく申し上げます。

白石副主査 ありがとうございます。

先ほど御紹介申し上げましたけれども、こちらが教育ワーキングの安念専門委員でございます。

そして、私の右端が福井専門委員でございます。

それでは、今から保護者の方にお話をお伺いしたいと思いますけれども、同時に御出席の皆様方のプライバシーを最大限尊重して会を進めさせていただきたいと思っております。あらかじめ、その点につきまして御協力をお願いしたいと思います。仮に皆様のお名前をお呼びする呼称として、左からMさん、Kさん、Oさん、Cさん、Yさんと御紹介をさせていただきたいと思っております。

まず、お話を伺ってまいりたいと思っておりますが、Oさんから口火を切っていただきまして、Oさんが子育てに関わってこられた中から、先生に問題をお感じになった当時の状況について、お子さんが何年生のときとか、その当時どういう先生であったかとか、その方の処遇がどういうふうになったかということを具体的にお話しさせていただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

保護者O それでは、お話しさせていただきます。

昨年12月なのですけれども、中学校2年生の保護者会に私が参加いたしまして、直前に定期考査があったのですが、その結果がグラフになって、事前に保護者に配られておりまして、その結果に大変驚いたのですけれども、10点ごとに人数分布の棒グラフ、0点~10点は何人、11点~20点は何人というような形で棒グラフの表がそこに書かれていたわけですが、それが見事な台形といいますか、ほとんどすべてのところに分布しているということで、極論すれば40人いれば各ところに4人ずついるみたいな状態だったのです。

それについて、保護者会でどうしてこういう状態なのでしょうかとということ質問したわけですが、そのときに、今、授業時間がゆとり教育の関係で相当減っていますけれども、減らされた授業時間の中ではわからない子にわかるように教えるのは不可能だという話がぼろっと出たわけです。

私は大変ショックだったのですけれども、皆さんはそうでもなかったのかもしませんが、要するに、以前ひとこぶラクダといって、平均点を大体一つの山として、できる子とできない子に山ができる。それが、最近ではふたこぶラクダという形で、できる子とできない子が固定化されるというような話は知識として知っていたのですけれども、結局、今の教育というのが、できない子は、小学校でついた差が、中学校ではそのまま固定化されるような教育が行われているのだということに非常にショックを受けまして、そのことに結局しようがないことなのだと言ってしまう先生に非常にショックを覚えたわけです。

ただ、よくよく考えてみると、逆に無理なものは無理ということが自然なのかもしれないというふうにも思ったわけですが、今、結局、学校選択制などが行われていますが、その関係で平均的に見ると、明らかに地域格差も生まれているのです。比較的富裕層が住ん

でいる地域と、比較的貧困な地域のような形になっていると、明らかに富裕層の平均点が高いという現状も出ていて、それはやはり塾などに行っている子が多い。

平均的なことですがけれども、そういう実態が既に出ているということで、そういう点でいくと、今、問題教師をどうするかということでは、追い出してしまえばそれで済むという問題でもなく、追い出されたところでまた問題が起こるわけですから、そういう点では、そういう人たちも含めた教育環境をどういう形で整えていくかということが非常に大きな問題ではないかと思っております。そういう点では、行政全体にも、今、大変問題があるのではないかというのが私の問題意識でございます。

とりあえず、以上です。

白石副主査 ありがとうございます。先生も現場で既にあきらめてしまっている状況があるということと、問題教師を追い出してもそれが循環してしまうという2つの問題点を御指摘いただきました。

それでは、Mさんお願いいたします。

保護者M これは、私の子どもではなく、私が中学校でPTAの執行部役員をしていたときに関わった問題です。

中学校の国語科の教員が、定期テストの中で設問の一つとして、ある子どもを中傷する作文を全文載せて、しかもMとかYとかしないで全部名前入りで載せて、その設問は何かというと、この文章を読んでみんなが感じたことを書きなさいという設問だったそうです。

親に伝えられなかったらしいのですが、それが実施されてしまって、保護者も子どもも屈辱で、結局採点まで至った。そして、テスト返却のときにその教員が更に、その学年は3クラスあったのですが、3つのクラスの中で子どもたちが中傷を真に受けていると書いてしまった感想を全部読み上げた。その読み上げたのを聞いた段階で、子どもたちの中にひどいと言って親に訴えた子どもが出てきて、その問題の家庭にもわかって、学校とPTAの執行部に、これをこのままにしないでほしいというふうに入ってきた問題です。

この教員は、もともと非常にイデオロギー的に強い意思を持っている人だそうで、私もPTAの執行部だったものですから、子どもにその手のプリントを校内で子どもを経由してお母さんに渡しなさいと言って手渡すという人だったので、もともと困ったなどは思っていたのですが、この問題については全く謝罪をしませんでした。

ただ、教育委員会の対応はよかったので、保護者は教育委員会と管理職を訴えることはしないけれども、この先生については都教委の判断を待ってから、場合によっては民訴を起こすと言ったので、それは当たり前ではないかという話になりました。

白石副主査 Mさん、それは何歳代ぐらいの先生ですか。

保護者M 50歳代のベテランです。

福井専門委員 今、聞こえなかったのですが、それでどうなったのですか。

保護者M 都教委の最終的な判断は、文書訓告、訓告の中では一番重いそうですが、それだけでした。

その教員は、やはりその次の年度替わりのときに区から別の市に異動になりましたが、普通に異動になっています。

白石副主査 まだ教員を続けているということですか。

保護者M 勿論、そうだと思います。

それで、その保護者は東京都の発表を待って、裁判を起こしました。それまでにも弁護士を通して何回も謝罪の申入れとかをやっていたのですが、一切応じなかったのが、裁判になっていると思います。

裁判がどうなったのか、私もそこまでは今回聞いていないんですが、この親子の傷はとても深く、電話をかけるにもかけにくいような状況のときもあったくらいでしたけれども、ただ、このときに私が一番、嫌だったと思ったのは、その学年のテスト監督をした先生方が見てまずいと思った。でも、実施してしまっていた。皆さんがおっしゃったのは、この子の人権を考えたときには、これはすぐにでも回収すべきだったと言ったら、それはできないというような先生方が多かったのが、私は残念な部分です。

白石副主査 その問題が発覚したときに、マネジメントである校長先生の対応はどうでしたか。

保護者M 校長は、教育委員会の方を向いている人なので、まずおろおろとお伺いを立てていたと思います。かえって、今で言う副校長、教頭の方が即日テスト返却したものを回収するとか、そういういろいろな動きに入ってくれました。

白石副主査 ありがとうございます。

Kさん、いかがでございましょうか。

保護者K 今、高校1年生の息子がいるのですが、その中学校3年間の話です。

中学校1年の2学期ごろに、学校側から校内パトロールをしてほしいという要請が来まして、授業ができていないということで、私は本当に軽い気持ちで参加しました。

参加したところ、校内にたむろしているグループが幾つもあって、たばこを吸っている子がいたりとか、本当にテレビのドラマで見るような状況を目にしました。それで、授業はと言うと、先生はしゃべっています、前の方の10人ぐらいは聞いています、でもあとはみんな机を変な方向に向けたり、漫画を読んだり、本当にそういう状態だったのです。私たちがいても、子どもたちは全然意に介さないのが、こんな学校に行かせられないと思いました。

息子にも言ったのですけれども、息子もこんなのはいつもだからということで転校する気もないということで、これは本当にどうしようもなかったのですけれども、私もどうしようもないので、その場は収めてといたしますか、1年間様子を見てしまったのです。だから、さすがに校長先生が替わりました。それはPTAからの動きだったそうなのですが、私はそのときには入っていなかったのが知らなかったのですが、それで2年、3年と私はPTAに入って、今度の新しい校長と間近に話したりするようになって、学校にもしょっちゅう行って見ていましたら、よくなったのです。授業が崩壊している状態もなくなりまし

たし、ふらふらしている子もいなくなりました。

でも、今度は、その校長先生もやはりだめだったのです。なぜかといいますと、保護者と地域の声を聞かないということで全く反対をされてしまって、この3月に出ました。それで、また新しい校長先生が今年来たのですが、依然として保護者からは学校は全然よくなっていないということでした。だから、校長先生が替わっても学校は余り変わらないというのを。

白石副主査 毎年、校長先生が替わっているというようなことですか。

保護者K いえ、2年間はいました。

白石副主査 当初、最初の校長先生からパトロールの要請があったときには、自分たちがなすべきことをお手上げ状態で保護者にやったという認識を保護者の方たちはお持ちだったわけですね。どういう意図で、どういうふうな呼びかけがあったわけですか。

保護者K 手紙が来まして、こういうことを御存じですかと言って、校内で花火をしている人がいる、たばこを吸っている人がいるということ。でも、うちの息子はそういうことを一切言わないので、やはり子どもとしては親に心配をかけたくないということではないのです。

だから、情けない話なのですけれども、全く見えていなかったんです。それで、行ってみて初めて知ったということで、そこに行かないお母さんたちは、勿論、最後まで知りません。

草刈主査 校内パトロールをやってくださいと言ってきたのは、どういうところですか。教育委員会ですか。

保護者K いえ、学校側からです。でも、皆さん忙しいから、出る人などほとんどいませんでした。

白石副主査 ありがとうございます。

それでは、Cさんいかがでございましょうか。

保護者C 今、小学5年生の息子が、小学1年生のときなので4年前になりますが、新入生として入ったときなのですが、一時期、1学期の終わりごろ、行かない、行きたくないというような時期がありました。一緒に付いていくと、何人か学校まで来て、お母さんと一緒に手を引かれて保健室に行ったりとか、ほかで教室に入れない同じクラスの子も見かけたのです。

うちは、もともと幼稚園のころから引っ込み思案で、慣れるのにとても時間がかかるころがありましたので、小学校に行ってもまたやり直しかなというような気持ちもあって、泣いたこともありましたけれども、とりあえず連れていっては置いてくるということを何回かしました。そのうちに夏休みが明けて、2学期、運動会などがあって気持ちが変わって、行かないとか言わなくなったりと、いろいろ波があったり繰り返しながら、とりあえず1年間終わって、次の年は担任が替わりました。

そこでそのままだったのですが、次の年になってから、元の担任が新しい、別の学年の

クラスの担任を持ったんです。その学年で、1学期ごろから問題が表に出ていたらしくて、それは教室内での威圧的な態度であったり、体罰といいますか、女性の教師なのですが。

白石副主査 何歳ぐらいでしょうか。

保護者C 当時、30歳代後半ぐらいです。

つねるとか、そういうはっきりと見えないような、跡が残るとかというような体罰ではないのですが、それをよく繰り返すとか、授業中にちょっと発言が多い子に対して無視をするとか、授業の妨害になるとかそういうことを次の学年でいろいろあったらしいんです。

その中で、とうとう年末になって、ある生徒が精神的に何か少しおかしくなって、病院に連れて行って、お医者さんといろいろ話していたら、医師の方から、この子の今の原因は先生にあると思われるので、しばらく会わせないでくださいというような診断が下ったということで、学校の方がこのまま続けさせられないということで担任を外したそうです。

白石副主査 年度途中で外したのですか。

保護者C そうです。2学期でとりあえず外して、急なことなので、教頭が替わりますということでした。

そこで、全校的に問題が発覚したのですけれども、うちの子どもの場合は1年間過ごしてしまっただけです。そこで去年はどうだったのですかという話になって、もう少し軽く考えていたのですけれども、そう言えば学校に行かなかった、行かなかった子が何人もいたのです。

白石副主査 そういう問題が発覚してから、校長先生とか教頭先生は迅速に処理をしてくださいましたか。

保護者C はい。そこまでに、次のクラスの保護者から見ると1学期から言っていたのにというのもあると思うのですけれども、結局、行動を起こしたのが2学期の終わりのときです。

白石副主査 半年以上経ってからですね。

保護者C それは、医師の診断がきっかけになったことで。

白石副主査 その担任を外された先生は、今は担任を持っていらっしゃいますか。

保護者C 今は、その後、会わせてはいけないという状態だったものですから、それでは校内で研修をするという形にしたのですけれども、生徒と会ってはいけないということで、学校の校舎の一番奥の部屋を、その先生の研修のために空けたのですが、そこに閉じ込めたといいますか、逆にその先生が幽閉した、人権侵害だというような。

白石副主査 不登校になっていた方とか、通院をされていた方という方は、現状は元のとおり学校に行っていない方ですか。

保護者C はい。

白石副主査 わかりました。ありがとうございました。

福井専門委員 複数の生徒さんが、医師の診断を取ったわけですか。

保護者C それは1人です。ただ、ほかにもいろいろダメージを受けた子はいて、教頭、校長の方にはいろいろ話行っていました。

福井専門委員 その会わさない方がいいというのは、その子と先生の接触をさせない方がいいということですか。

保護者C そうです。それは1人です。

福井専門委員 それに対して、全生徒と会わせないようにしたわけですか。

保護者C その方が、会うという確率が減りますね。

福井専門委員 ほかのお子さんは、その先生との関係はどうだったわけですか。

保護者C 大分傷ついたお子さんは何人もいました。

白石副主査 幽閉しても、何ら物事の解決にはならないような気がするのですけれども、学校に来てお給料は付いているけれども、別の教室にいるという状況について、保護者の方々からそれはおかしいという御意見とかは出てきませんでしたでしょうか。

保護者C 私は、率直に言って、こういう場合に何か再教育とか、研修とかそういう機関はないのですかという質問をしたのですが、あくまでも本人が行くと言わなければ行かせられないのですか。

白石副主査 そんなことはないと思います。

保護者C そうでもないのですか。

ですから、本人が学校に来ると言っているのを研修しなさいとは言えないということだったのですが、結局来なくなりまして、弁護士を立てて、人権侵害という形になってしまったので、大分こじれてしまいました。

白石副主査 ありがとうございます。

草刈主査 ちょっとごめんなさい、事実関係がいまいちよくわからないのですけれども、おたくのお子さんは、1年間その先生の担任でやったわけですね。その間はどうかだったのですか。

保護者C 嫌になったり、また学校に行ったり、また嫌になったり、学校に行ったりという。

草刈主査 やはり1年生のときにですか。

福井専門委員 その先生は、その次には何年生を持ったわけですか。

保護者C 次は、3年生だったのです。

福井専門委員 ということは、1年生の発達度合いと3年生の発達度合いで先生を見る目が違うから、1年生の子たちは何も言えなかったというのが実態ですか。

保護者C それは、保護者が1年生の隣のクラスの先生になぜ声を上げなかったのですかといつも質問されたのです。考えるに、入ったばかりで第一子が多かったし、学校はもっと、今までは甘かったのだといえますか、厳しいところもあるのだ、きちんとしなければいけないのだと思ってしまった人もいます。

福井専門委員 そうすると、そのときには1年生のときの保護者の方はだれも問題だと

認識していなかったということですか。

保護者C 何か変だな、その程度でした。

福井専門委員 Cさん自身は、お子さんからどういう事実をお聞きになりましたか。

保護者C 行かないと言って、朝、例えば家でテーブルにしがみついて泣いたり、そういうことを何回か繰り返し。

福井専門委員 それは、なぜというふうに聞かれたのですか。理由は聞けなかったのですか。

保護者C 理由は、余り話さない子なのですけれども、嫌だぐらいしか言わないのです。

勿論、先生にも何かあるのでしょうかという相談はしましたが、その先生のとらえ方としては、ちょっと困難なこととか、大変なことを嫌がるという、怠けではないのですけれども、少し力が要ることを引いてしまうといいますが、もうちょっと頑張ればいいのにと。

福井専門委員 Cさんが、当該先生に相談されたということですか。

保護者C そうです。直接、相談しました。

福井専門委員 どういうふうに相談されたわけですか。

保護者C 朝になると学校を嫌がるのですが、学校の様子はどうかというような話をすると、例えば運動会になると割と積極的に行くのです、運動会が近いから最近元気なのですと言うと、そうなのです、そういう楽しいことはやるのですと言われるので。

福井専門委員 ほかの保護者の方とかとは相談されなかったのですか。

保護者C それは、相談しませんでした。

福井専門委員 実際には、ほかのお子さんでも行きたくないというようなお子さんとかはいたのですか。

保護者C いました。

福井専門委員 それは、保護者の間で全く話題に、うちもそう、あなたのところもそうというのは話題にはならなかったわけですか。

保護者C たまたま行かなかった子が、やはり幼稚園でもときどき行きたくなくなってしまような子だったので、相変わらずだというような、両方でそんな意識があったのかもかもしれません。

草刈主査 要するに、学校の話ではなくて自分のお子さんのせいなのだという理解を失ってしまった部分もあるというような感じですね。

白石副主査 ありがとうございます。よろしいですか。

福井専門委員 御自身のお子さんからは、事実としてはどういうことをお聞きになりましたか。どういうことがあったとか、どういうことをされたということは何か具体的には聞かれましたか。

保護者C 帰りは、隣のクラスに比べていつも遅いのです。そうすると、何か途中になっている図工だとか、作文だとかが終わるまでは帰さないとか。

福井専門委員 全員をとめてですか。



保護者C 全員のときもあるし、個人的なときもありました。やらないで帰ってきてしまうと、やはり罪悪感から次の日は行かないというようなことはありました。

白石副主査 まるで『女王の教室』ですね。

お待たせしました、ではYさんお願いいたします。

保護者Y 現在、子どもが2人おりまして、上の子は今6年生なのですが、その子に関わった担任の先生についてお話をさせていただきたいと思います。

まず、1人目の先生なのですが、この先生は子どもが小学校1年生のときに担任をしていただいた先生です。教師は年配の、多分60近い女性の先生で、普段、日ごろの子どもの書く作文とか、プリントとか、日記について採点やコメントが非常に遅くて、大体1か月ぐらいかかって、1か月後ぐらいに返ってくるという状況で、しかも返ってきたものを見ると、余り採点されていなかったりするものもあったということで、ちなみにうちの息子の夏休みに書いた日記なども、冬休み直前に返ってきたという状況でした。

さすがに、保護者会などでも、せめて1週間単位で採点をしてほしい、1年生で入ったばかりなので、子どもの様子を見たいので返してほしいという話があっても、結局、先生の方はその場では「はいはい」という形で意見を受け入れるのですが、結局、先生の態度は1年間全く変わらず、同じ状態だったということです。

白石副主査 授業の事務処理が遅いとか、行動が非常にスローペースということ以外に、授業のわかりやすさとか、子どもとのコミュニケーションについてはいかがだったでしょうか。

保護者Y それについては、特に授業参観に行ってみる限りは、私が見る限りはそんなに問題があったようには思いませんでした。

白石副主査 御父兄からいろいろ御注文をお出しになられて、先生は努力をされた痕跡みたいなものは残っていますか。

保護者Y 申し訳ないのですが、結局、努力はされていなかったのではないかと思います。

白石副主査 それは、先生とそのクラスの御父兄だけではなく、教頭先生に何かクレームをおっしゃるとか、校長先生にお話をするというようなところまで。

保護者Y そこまでは行きませんでした。やはり周りの御父兄の方も、この先生はこういう先生なのだからという前評判もあったのかも、もともとひまわり学級といって、障害の学級をずっとされてきた先生で、たまたまうちのこのときに初めて1年生を担当されたという経緯もあったもので、周りはいくつかの先生なのだという感じで見えていたようです。

草刈主査 そちらでアンケートで書いていただいたもので、暴力的なことをやっている先生がいたのを聞いたという話がありましたけれども、そのことも説明してください。

保護者Y 実際、その事件があった年は、うちの子どもが入る前の年だったので、これはほかのお母さんから伺った言い伝えなのです。

具体的な年を言いますと、入学する1年前、平成12年度にあった話なのですが、教師は

20歳代の男性の教師で、その当時、先生は担任を持っていらしたらしいのですが、子どもたちが言うことを聞かないので、おとなしくさせようとして児童の前で刃物を振り回したりとか、あとは子どもの髪の毛を切ってしまうとかという事件があったそうで、それは当時、朝日新聞にも掲載されたということで、何かとその教師は子どもとの問題が多くて、その当時、PTAとか保護者会などでもその先生を辞めさせてほしいという声はかなり上がりまして、お母さんたちも校長先生に頼みに行かれたりなどということもされたいらしいのですが、結局、学校としても辞めさせられなくて、今、子どもがいる学校に先生はおられまして、担任は持っていないのですが、現在もうちは、上の子は算数を教わっていただきまして、下の子が理科を教わっているという現状です。

草刈主査 まだナイフなどを振り回しているのですか。

保護者Y それは、1回か何かわかりませんが、今はそういうことはありません。

白石副主査 そういう事態が起こったときに、後者の先生については教頭先生や校長先生はどういう対応をされたのでしょうか。担任を外すという以外に、それまでに、例えば呼んで注意をするとか、謝罪をさせるとか。

保護者Y 済みません、子どもが実際に受けたことではないので、言い伝えなもので、その辺の詳しい経過については私もよくわかりません。

白石副主査 ありがとうございます。安念先生、よろしいですか。

安念専門委員 はい。

白石副主査 では、今、5人の皆様方から先生についての問題意識というのを一通りお聞きしてきたのですが、あとは自由にディスカッションをさせていただきたいと思います。こちらの先生方からも、是非御質問をよろしくお願いします。

当会議の考え方の一つとして、いろんな考え方の先生というのがいた方がいいだろうと。単に教育大学、教職課程を経て先生になってきた人よりも、社会経験豊富な先生たちが教育現場にもっと出ていって、教育免許を持たない人でも後でそういうものを取れるような仕組みとして、いろんな人材に教育現場に入ってきていただいた方がいいのではないかと。という考えがあるわけですが、まずMさんいかがですか。

保護者M 私は、社会人を経験してから教員になったという先生を、実際に子どもがお二方お世話になっています。その2つが余りにも極端な例なので、社会人を経験したことによさも確かに評価しながら、こういう形で学校に入ったらと困るとい先生もいます。

というのは、会社で心を病んで、それで昔取った杵柄で入ってきた。しかも数学科とか何科とか、そのときにとても少なくなっている教員がいたりすると採用があるのです。そうなりますと、先ほどのナイフではないのですが、自分が心を病んだのだっただけなのに、非常に子どもたちの飲み込みの悪さとか、あるいは学級運営の悪さに関して。

白石副主査 非常に特殊なケースということですね。その先生は心を病んで、会社勤めをやめて、再度、学校現場に入ったらと。

保護者M　そうです。

白石副主査　もう一つのよい例というのを少し御紹介いただけますか。

保護者M　その方も、やはり会社人生の中で、これは自分の生きる道ではないと思ってしまったという意味では会社否定が入っているのですが、その方の場合には逆に、やはり自分は人間と接するのが好きだったというところで職種を変更した方で、しかも会社がまだ2けた行かない段階での切替えの方です。その方の場合には、私は非常にいい経験をされてきたかなと思います。

というのは、保護者会や何かで保護者におびえない、今、コミュニケーションができない先生が多いと思われませんか。そういう中で、保護者がこう思うのですけれどもということ割と一生懸命理解しようとする。ベテランの先生に限ってなんですが、そういうことは今まで言われたことがなかったですねとか、そういうことをおっしゃる保護者の方が最近いるのですねみたいにして封じ込めていこうとする方が多いんですが、その方に関しては割とこちらの側に渡ってくるような意識が感じられました。

白石副主査　ありがとうございました。

次の方に、社会人経験者の教員採用というのを伺いする前に、今Mさんから教員のコミュニケーション能力というお話がありましたけれども、これについてKさん、Oさん、どういうふうにお考えになりますか。

保護者K　私も、学校に行っても先生の顔が余り見えてこないのです。だから、さっきも校長先生の話ばかりしてしまったのですが、余り特徴がなかったのです。だから、いい先生も悪い先生も出会っていません。

個人的にもお話ししても、先生から言葉が余り返ってこないのです。こちらが聞いたことには答えてくれるのですが、ましてや先生の昔こうしたとかの経験、子どものころの話とかそういうことも今の先生は余りおっしゃらないのです。こちらが聞けば、どこ出身とかおっしゃってくれる程度で、あと中学校になると、PTAなどだとお酒を一緒に飲む機会もあるのですが、そういうときでも先生は余りお話しになりません。それはきっと、校長先生から抑えられているのでしょうかと疑ってしまうくらい、余り先生はしゃべりません。家庭訪問でも、こちらが聞いたことしかしゃべってくれません。

白石副主査　ありがとうございます。Oさんはいかがでしょう。子どもと保護者と向き合っているかどうか。

保護者O　よく保護者会で感じることですけれども、やはり一方的にお話をされて、あとはどうぞ、PTAのお話をしてくださいみたいに出ていってしまう先生までいるのです。そういう点では、一緒に何か問題解決していこうというような姿勢がある先生が少ないということはあると思います。

私は比較的、話ができる先生というのは多く知っているのですが、そういう先生から逆に情報を得てという場合がありますけれども、一般的には保護者会などは学校の先生とお話しできる本当に唯一の機会にもかかわらず、一方的な学校からのお知らせしかしゃべらな

いという方が結構多いです。

白石副主査 ありがとうございます。Cさん、いかがでしょうか。

保護者C 私は、子どもが3人いまして、10人以上の先生にお世話になってますけれども、やはりかなり差があります。本当に心から話せる先生、または保護者会でもいろんな意見をどんどん吸い上げてくる先生もいれば、形だけの保護者会になってしまったり、どちらかといえば私は保護者よりも生徒とコミュニケーションは取れているという方に重点を置きたいと思いますので、中には割と若い先生でも、保護者にはぎこちないのですけれども、子どもに対してはとても熱心で、子どもの方から先生大好きというような先生もいましたし、一概には言えないと思います。

白石副主査 Yさんはいかがですか。

保護者Y 今、Cさんもおっしゃっていましたが、結構先生によって非常に差があるような気がしまして、私も上の子と下の子がお世話になっている先生の様子を拝見していますと、やはりどうも傾向として大学を出てすぐに教員になられた先生の方が意外と意欲的というのでしょうか、新しい目で見られるという、活気があるという印象が強いです。かえって長い間教員生活をされているベテランの先生の方が、教育に対する意欲が薄れてしまうというのでしょうか、そういう気がします。

白石副主査 ありがとうございます。

先ほどの社会人の教員への登用について、Kさんいかがでしょうか。

保護者K やはり話題が豊富であるというよりも、子どもといかに接してくれるということが重点だと思いますので、社会人だからということでは、私自身はそんなによいかなというのは実は思っておりません。

白石副主査 わかりました、ありがとうございます。

当会議としては、頑張る先生にはもっと頑張る環境、だめだという言い方は変ですがけれども、若干問題がある先生は再教育ないし教育界から退出という厳しい措置も含めて、もっとほかの場を提供するということを考えたりもしているわけですが、Oさん、そういう仕組みをつくるために、教員の評価とか人事ローテーションについて、今とこれから、どういう仕組みを変えていけばいいとお考えでしょうか。

保護者O 非常に難しい問題だと思うのですが、今の私の住んでいるところでは、学校の先生が非常に来たくない地域になっているのです。

そういう点では、非常に新採の先生が増えている地域なのですが、そういうような状態ですと、先ほどのように民間からの登用ということも逆に言えば早くやってもらえればいいかなという感じもあるのですが、今、全体的にも団塊の世代が早期退職する傾向が非常に多くて、そういうことで若い先生が非常に増えているということで、そういうことでいくと受ければ受かるというような実態にもあるということで、これからますますそういう点では先生になってから資質を高めていただくような状態をつくっていくということは非常に急務だと思います。

ただ、今の傾向は管理が厳しくなって、個性も出さない先生が増えているというのが今の実態なので、その辺のところを変えていかないと、今、実際に校長先生が勉強会のようなものを行っている例があるわけですが、余り効果的でないと聞いているのです。それは、校長先生も教育委員会から言われてやっているという傾向が強くて、だからシステムをつくってもそこに魂が入らないという状態もあるので、非常にその辺のところは抜本的な改革が必要かなと思うのです。

白石副主査 ありがとうございます。

Cさん、Yさんにお伺いしたいと思いますけれども、子どもの学力が低下している中、やはり指導力とか子どもに教える能力については、どちらかと言えば塾の方が上回っているのではないかという意見もありますけれども、お子さんや周囲の状況をごらんになって、これについてはいかがでしょうか。学校か、塾か、どちらが子どもにとってわかりやすい、個別的で、それぞれが納得する教育というのを施してくれているのか。

保護者C 小学校では、私は塾に行かせたことはありません。受験を考えているお子さんは行かせているようなのですが、うちは行かせたことはないのですが、中学校で上の子が中学校の面談のときに成績が芳しくなかったのです。

先生から、塾は行っているんですかと聞かれたのです。そこで、先生は塾には行って当たり前といいますか、先生は7割方行っているとおっしゃっていたのですが、学校の先生も塾を含めて考えているということに実は驚いて、結局、娘を塾に入れてしまったのですけれども、勿論、家庭学習も話をしたのですけれども、学校の先生から塾は行っているのですかというようなこともあったので、そこで驚きました。

白石副主査 というのは、裏側から見ると、塾に行っていることを前提として学校教育があると先生たちが認識しているということですね。

保護者C そうです。

白石副主査 ありがとうございます。Yさんはいかがでしょうか。

保護者Y 私は、子どもはまだそんなことがないもので塾には行かせていないのですが、ほかの行かせている方のお話などを聞きますと、正直言って塾の先生の方が子どもに学習を教えるという意味では非常に意欲が高いのではないかと。やはり塾の授業が面白いというお子さんの話も聞きますので、学校に行っていてとても授業が楽しいという話は、正直言って子どもから聞いたことがないもので、教え方とかそういった意味では塾の方が今は面白いと。

白石副主査 それは何でしょうか。塾の先生の若さなのか、それともやはりいい教え方をした人はお給料が上がっていくというのか、どういうところに魅力があるのでしょうか。

保護者Y 塾の先生は、受験したい学校に受けさせなければいけないといった目標がありますから、やはり根本的にそういったことがあるのでしょうか。

白石副主査 どうぞ。

保護者O むしろ、学校は今、本当に無理と申しますか、先ほども言いましたけれども、

要するに土曜日もなくなって、学習内容が総合学習、それから私の地域でもIT教育や英語教育がどんどん入っているのですけれども、それから漢字の量だけでも全然、むしろ増えているわけです。それで授業時間が減っているわけですから、そういう点では学力をちゃんと身に付けるためには塾がない限り身に付かないという、今はそういう状態です。

それで、ほとんどのお子さんが塾に通っているような流れができてしまって、学校の先生もそれを前提とするような流れになっているという、非常に悪循環があって、今、そうして土曜日の補習や夏休みの補習がどんどん行われている実態もあるわけです。

話が進んでしまって申し訳ないのですけれども、学校の方が学校選択で結局学力の低いところが非常に指摘されるということで、手っ取り早く学力を上げるために学力テストと同じようなペーパーテストをやる時間を増やすという学校が多いのです。

白石副主査 子どもに慣れさせるためにということですね。

保護者O そうです。それは、要するに直前にテストのための勉強という形になりますので、身につかない勉強をさせられるわけです。

白石副主査 それは、結果として授業時間を削ってテスト練習をさせているということですね。

保護者O そうなのです。そういう実態があって、結局そこではますます学力が付かない、要するに本当の学力が付かない、見せかけの、そのときだけ点数が取れるというような実態が生まれているという、そういうことで競争というのが非常に悪い方向に動くという例もあります。

白石副主査 漠然としたお聞きの仕事で恐縮なのですが、皆さんからごらんになってよい先生、私たちの子どもたちにはこの先生はいい先生だというのがいたと思うのですけれども、Mさんからよい先生の具体的な条件を少し挙げていただいて、今、学校現場を見渡して、その先生たちは何割ぐらいいるか。10人に1人とか、20人に1人とか、どれぐらいという目安みたいなものを教えていただけませんか。

保護者M 私の考えるよい先生というのは、高校時代にめぐり会った先生ですが、正規の授業もさることながら、ある程度、自分の教科における専門性のある部分も高校時代にかじらせてくれて、大学への興味をつないでくれていて、なおかつ進路指導についても個別対応が二十数年前にできていた。

なおかつ、浪人した子どもたちに対して駿台とかに行けない場合の子どもたちを土曜日、日曜日とかに自宅に呼んで、英語の先生だったのですが、最高学府を出ていらしたので、英語のみならず、理科、数学、全部教えるというふうなことも、寺子屋みたいなことも、いわゆるお金なしに。

白石副主査 課外授業もおやりになる、熱意のある先生ということですね。

保護者M そうです。だから、聖職と言ったら古い言い方かもしれませんが、そういうことが感じられる、体温のある先生にめぐり会っていて、私は幸せだったと。

白石副主査 使命感があたりになって、教育熱に燃えていらっやって。

保護者M そうです。しかも、教科に対して非常に造詣が深いというところもあります。

白石副主査 Mさんからごらんになっていて、そういう先生は、時代も移っていると思いますけれども、増えているか、減っているか。

保護者M その先生は、部活に対しても非常に熱心だったのですが、そういうトータルでできる先生というのは今、非常に少なくなっているのではないのでしょうか。

例えば、あるバスケットの指導に関してのみは、家庭は本当に大丈夫ですかというぐらいになさる方もいる。でも、その方は、例えば補習がぶつかってしまっていると、その補習に行く人などはレギュラーにしないというふうなことを公然とおっしゃるとか、結局、この学校に集めた子どもたちが何を求めてこの学校に入っているのかというところをトータルで見てバランスを取ってくれるのではなく、先生たちがみんな一人ひとりお山の大将で、自分のお城を守ることに必死になっていて、自分のお城はきれいに結果を出したいのです。でも、子どもはいろんなお城を経験したいと言っているのにいけていないというのが。

白石副主査 バランス感覚が非常に悪いということですね。

保護者M そうです。だから、あるものに関しては非常に熱心な方は多いと思います。

白石副主査 ありがとうございます。

Kさん、いかがでしょうか。Kさんがお考えになるよい先生の条件といたしますか。

保護者K 私自身も、ごめんなさい、今、本当に全然思いつきません。なぜかといいますと、そんなに高いものを私も求めていません。子どもが楽しくといいますか、学校に行けばいいという状態だったので。

白石副主査 でも、それが満足できないわけですね。楽しく学校に行けていない子が多い。

保護者K 今は、行けていない子が本当に多いのです。だから、先生も勉強ができない子を教えなければいけないし、学校へ来ない子を学校へ連れてこなくても、受け入れられないわけにもいかないし、本当に先生はすることがいっぱいあって、私は先生に全部を求めることはできないので、一人の生徒に最低これだけということをちゃんと与えてくれれば、それで十分なのです。

白石副主査 多くを望めない状況になっているということでしょうか。

保護者K はい。

白石副主査 Oさん、いかがでしょうか。

保護者O 基本的には、人間としてある部分、対等に話ができるといたしますか、そういう点では子どもに対しての人格を尊重してもらえる、また先生自身に弱点があっても、そのことがある意味さらけ出せる先生に非常に魅力を感じます。ある意味、それこそどじな部分が見えても、それも含めてその人の個性といたしますか、人間性が子どもの中に見えてくる先生はとていろいろな形で共感ができると思うのです。そういう先生が望ましいというふうに考えています。

白石副主査 今、そういう先生が増えているか、減っているかというのはどうでしょうか。

保護者O 減っていると思います。

白石副主査 Oさんは、お子さんを3人育てていらっしゃるわけですね。その3人のお子さんの子育てを通して、ずっと先生の状況とかをごらんになってきたわけですが、減っているということであれば、何で減ってきてしまったというふうにお考えでしょうか。

保護者O 1つには、非常に今、病気になる先生が多いのです。それは、いろんな外的な要因で非常に多忙になっていると聞いています。

そういうことで、精神的な病気の方も多いと聞いていますし、人間としての余裕がないといえますか、そういうことで、要するに一つの仮面を付けてしまって子どもたちや父母の前にも立っているという実態が生まれてくるのではないのでしょうか。

白石副主査 わかりました。安念先生、草刈さん、いかがでしょうか。

草刈主査 私たちは、いろんな先生の話とかを聞いてみると、校長先生の話が割と多かったわけですがけれども、今、Oさんからお話があったように、ものすごく忙しい人とか、それもいるのですけれども、一方で、アンケートにも書いてありますけれども、要するにやることだけ適当にやって、のんびりとやって、余りまじめにやらない、極めておざなりにやってしまう先生が片方にいて、それで済んでしまう学校なのではないでしょうか、一方、さっきのKさんの話ではないけれども、やはり非常に困難校というのでしょうか、難しい状況にある中学校とか高校で、本当に校長先生以下が必死になって学校をよくしようと思って努力をされている学校も随分あるのです。

それは、校長先生だけじゃかりきになってもいいわけではないので、先生全体が、あるいは相当何割か、5割以上の先生がやはりこれではいけないと思って一生懸命やってよくしようとして、よくなっている学校の例などを聞いたのですけれども、そこで私たちが感じたのは、同じ先生でもそういうふうにもものすごく一生懸命やっている先生と、それからサラリーマン的に、サラリーマンでもましな人は多少いますが、悪い意味でのサラリーマン的に時間さえ経って給料をもらえればいいと思っている人たちと、要するに待遇というのは金の問題もあるのですけれども、そうではなくて、ほかにもいろいろあると思うのですが、その人たちが同じ処遇の中にある、つまりいい先生、本当に頑張っている先生にはそれなりのちゃんとした処遇なりをすべきではないか。

そうではないと、元気が出ないし、やはりいい先生はどんどんよくなってほしいわけですから、そういうところを非常に感じたのですけれども、ここにもそういう先生はやはりと書いてあるのですけれども、お金の問題は制度の問題で、今、人事院が何かで国家公務員の給与制度についての能力評価みたいなことをやろうとしている。その流れの中では、先生はどこかで早くやっしまえばいいのではないかと思うのですが、先生というのはそれだけではないのだろうと思うのです。

そういうときに、そういう先生を元気にさせる処遇制度というのは、皆さんの立場から



見てこういうふうによればすごくいい効果があるのではないかという、お金の話はともかくとして、先生にもっと元気にやってもらえるような策というのは何かありませんか。

白石副主査 順不同で、思いつくところからどうぞ。

保護者C 私は、同級生が神奈川県で教師をやっているのですが、韓国に研修に行くことになったという話をして、お酒を飲みながらですけれども、優秀な教師として推薦されて今度行くのだというような話をしていて、そういうのが一つの方法かなと。

白石副主査 研修制度の充実ということですね。

Yさんはいかがでしょう。保護者の声などをもっと評価に生かしていくとか、先生の人事異動に、こういう先生が来てほしいというような声として反映していくというのがありますが、現状では保護者の声は十分学校に届いているというようにお考えでしょうか。

保護者Y 一応、うちもPTAがありまして、会長を始めそれなりに活動はしていると思うのですが、そこに来られる校長先生によっても随分対応が違うのではないかと思います。現在の校長先生は教育界から来た先生なので、やはり前の年の先生に比べると意識が多少違うのかなというふうには思います。

白石副主査 Oさん、いかがでしょうか。今、草刈主査の方からお話しになった頑張れる先生をもっと頑張らせる仕組みということで。

保護者O うちの地域が非常に特殊な地域なので、今、結局すごく競争してしまっているわけです。ですから、地域のお祭りに学校の先生がほとんど来てボランティアさせられるというような状態で、毎日9時、10時までほとんどの先生が残っているという学校の状態ですので、先ほど始まる前に出た重点支援校の先生なども、去年の話でしたけれども、要するに地域の学校が頑張っている姿を出したいということで、展覧会の準備に1週間ぐらい、ほとんど午前様まで教員が残って体育館の展示をやったという例を聞いたのですが、違う方向で頑張っているのではないかという、勿論、地域のお祭りとか一生懸命やっただくことはお願いしたいのですが、方向が違うのではないかという。

白石副主査 どうぞ。

安念専門委員 Oさんのおっしゃることは、私、全くそのとおりだと思うのです。政治家ではないのですから、お祭りでおだんごを焼いてくれなどということを保護者は何も期待しておりませんね。

なぜ、そういうふうになるかといいますと、私、結局はユーザーが選択できないからだと思うのです。つまり、管理職はみんな上を向いているわけですから、官僚組織ですから、上にほめられることをすればいいわけです。彼らはユーザーにほめられることをする必要はないのです。

ここからが、私が伺いたい学校選択制なのですが、学校選択制についてはいろいろ御批判もあり、今の御発言からもデメリットも大きいという、現にそういう弊害があるということもおっしゃるとおりだろうと思うのです。

問題は、選択させない制度と、選択の自由が認められるのと比較してどちらがよいかと

いう問題なのです。学校選択制のすべてがいいということがあるはずがないのですが、やはりメリットというものもあるのではないのでしょうか。つまり、嫌だという人にその学校にいろというのは、これはこれで随分残酷な話だし、今だって実は格差はあるのです。それをただ、ないという神話をつくっているだけなのではないだろうかと思などは思うのですが、もし何か御意見を承ることがありましたら。

保護者M かなり前から、親は神話があるなどと思っていないと思います。確かに、私が見守りをしている地域には2つの小学校があって、1つは8割ぐらいが私立進学してしまう小学校、1つは今までは割と公立進学がメインの小学校だったのですが、完全5日制の導入で、もう一つの小学校もかなりのところが公立中学を避けてしまうことになったので、これはかなり様子も変わりつつあるのですが、そうなってくると、今度、親たちはこの小学校から私立進学をしようと思わず、実績のある小学校に行きたいと思ってしまう。そこは既に選んでいるのかなという気もします。

ただ、私が思うのは、選択制がえてして弱者を排除するような動きに出てしまうのではないか。小学校、中学校のまだ多感な時期、あるいは他者と助け合える年ごろのときに、いろいろなハンディキャップとか、いろんな家庭状況を背負った子どもたちとともに、その子を支えるとかそういう生意気な話ではなく、その子たちと同じ活動をする経験が、きっとこの人間たちが大人になったときに、相乗効果でお互いにすごくいいだろうと思うときに、今、聞いている選択制は、それに対しては非常にマイナス方向に行ってしまうことがあるのだとすると、いいか悪いかという判断のときに悪いことの方が人間を育てるという意味では出てくるのかなと感じています。

そうではないような選択制の方法が提示された場合には、もしかしたらもっと個性豊かな学校選びという形でできるかもしれませんが、今は粒ぞろいを求めたものに走っていないでしょうか。

安念専門委員 そこが知恵の出どころですね。私どもも、世間から私どもの委員会は市場原理主義者で、格差があってもいいではないかというような考え方だと思われていますが、全然違って、我々はまさに教育弱者を徹底的にサポートしなければいけないはずだと考えています。そういうものの中の一つの工夫として、実は学校選択制があるのではないかという考え方ですので、学校選択制を何も自己目的にしろなどとは全然思いませんので、そこはやはりお互いに知恵を出して、よりよい選択制というものがありはせぬかというところで、いろいろ教えていただきたいと思っております。

保護者M 既に、都立高校が学区撤廃で、広範囲な学校選択制になったと思うのですが、やはりそうなってくると、実際はこれぐらいの大福もちを提供しているのですが、学校宣伝の場では公立学校にもかかわらず、こんなデコレーションケーキですというふうなことを言います。

そして、私たちはPTAとして、やはり優秀な子どもたちに後に続いてほしいので、私たちも実はまずいなと思いつつ、その宣伝に協力します。でも、私たちがしたたかです

から、後で校長たちにああ言って集めた子どもたちに詐欺を働くのですかと言って、それだけの教育内容を提供しろということは交渉しますけれども、えてして、情報公開とおっしゃいましたが、情報公開がやはり優秀な広告代理店を付けているか、付けていないかみたいな形になっていきやすいところは。

白石副主査 情報操作されているということですか。

保護者M それはあると思います。

先ほどのいい先生という話に戻らせていただきますと、それぞれの先生は、勿論、新卒からすばらしい、パーフェクトな先生などいないのですけれども、もっといろいろな年齢層の職員室の中で切磋琢磨してほしいと思うのに、今の職員室にはその雰囲気はなく、自分の城は自分で守る、おたくにも口を出さない代わりに、うちにも言うな、学級経営に文句を言うな、あるいは教科経営に文句を言うなというふうな学校が小中高で、悲しいけれども、これは現実です。

管理職は、そのマネージメントをしろと、今、教育委員会に言われていると思うのですが、できていません。今、授業観察というふうに校長と副校長で駆けずり回っていますけれども、あれは時間割が組まれていて、全部予告されています。高校でも、中学校でも、娘がよく言っていました、授業観察前には同じ授業をもう一遍するのだと。それで、だれかが質問をすると、その質問はいいから必ず言うようにと、先生たちは平気でそういうことをすると言っていました。

あとは、平均点が低いというふうに保護者が、いわゆる定期テストの結果を見て文句を言うと、試験前に定期テストと同じような事前プリントを配ります。今の先生たちは、そんなふうな形で、全然お互いに批判ができない。

それに、さっき思ったのは、先ほど1年生で学校に通えにくくなってしまった先生の隣のクラスの先生が、何でもっと声を上げなかったのかとおっしゃった。それでは、その先生は、同じ学年の隣のクラスとして気がついていたのではないですか。それをやってくれない。これは今の学校現場の現実だと思います。

白石副主査 今、Mさんがおっしゃったことは、私も一人の保護者として感じておりまして、例えばクラブ活動などでも顧問制度があると思うのですが、複数で顧問をやっている。

私の知っている中学校で、体罰に近いようなトレーニングがあったのです。グラウンド30周とか、腕立て伏せ1,000回とか、体罰的にそういうことを課しておきながら、ほかに先生もいたのですけれども、それは先輩の先生だから、先生、それはおかしいですということが言えなかった。多分クラブ活動でそういうことがあるということは、授業とか教科指導でもそういうものがあるのではないかというふうに疑心暗鬼になっているのです。

そろそろお時間が参ったようでございますので、最後に草刈主査から一言締めさせていただいて終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

草刈主査 今日はいろいろ貴重なお話をいただきまして、どうもありがとうございました。

た。これを参考にして、我々もいろいろいい教育制度をつくる、今後の教育についていい方向に行くように一生懸命やりたいと思っております。

ただ、私、すごく違和感があって、要するにいい学校、例えばさっきの大福もちの話ではないけれども、東大とか、京都大学とか、慶応とか、早稲田とかそういうところに行くために一生懸命勉強したりしているのだろうと思うんですけども、どう考えてもそんなところを出たから何だという世界に世の中がなってしまうているのです。

例えば、私の会社で採るときに、学校の名前などだれも聞かないのです。一体、お前は何という質問をして、会話の中からこいつはどういう可能性を持っているかというのを問うだけで、最後には、何だ、あいつは早稲田だったのかという程度、そのような時代になっってしまうているわけで、それを求めてまだ競争しているということ自体が極めて、私などが見ると不思議な世界だなといいますか、教育とはだれかが後ろで糸を引いているのではないのか、おかしい世界だなという感じがするので、そこの辺が私の、皆さんに申し上げているのではなくて、一般的に言って変だなと思っていますということだけ、最後に申し上げたいと思います。

今日は本当に、どうもありがとうございました。

白石副主査 長時間にわたり、ありがとうございました。